

6  
士師  
聖徒伝 72

# 「独りよがりの 信仰の末路」

士師記10～12章 エフタ

## 【今日のアウトライン】

- 0. イントロダクション
- I. イスラエルの罪 10章6～18節
- II. アンモン人との交渉 11章1～28節
- III. エフタの誓願 11章29～40節
- IV. エフライムとの戦い 12章1～7節
- V. まとめと適用

信仰者が落ち込むとき  
主に聴くことから始めよう



ヨルダン川東岸



【無垢の時代】

【良心の時代】

【人類統治の時代】

【約束の時代】

【律法の時代】

【恵みの時代】

【御国の時代】

天地創造

墮罪  
~大洪水

バベルの塔事件

アブラハム  
~ヤコブ

イスラエル  
王国時代  
メシア初臨

聖霊降臨  
世界宣教  
メシア再臨

千年王国  
大審判  
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

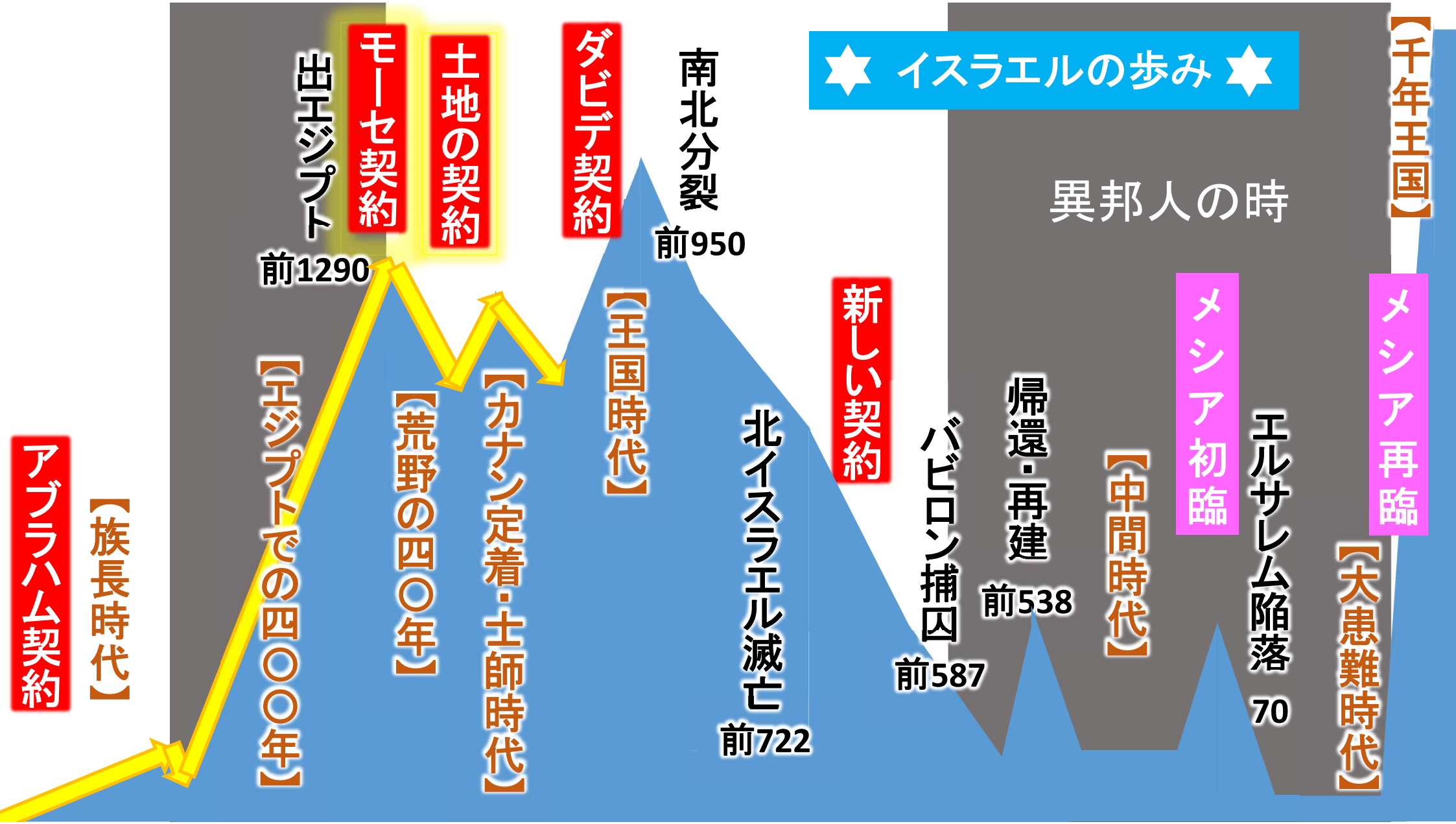
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

未来

★ イスラエルの歩み ★



アブラハム契約

【族長時代】

【エジプトでの四〇〇年】

前1290

出エジプト

モーセ契約

土地の契約

【荒野の四〇年】

【カナン定着・士師時代】

ダビデ契約

【王国時代】

前950

南北分裂

北イスラエル滅亡  
前722

新しい契約

前587

バビロン捕囚

前538

帰還・再建

【中間時代】

異邦人の時

エルサレム陥落  
70

メシア初臨

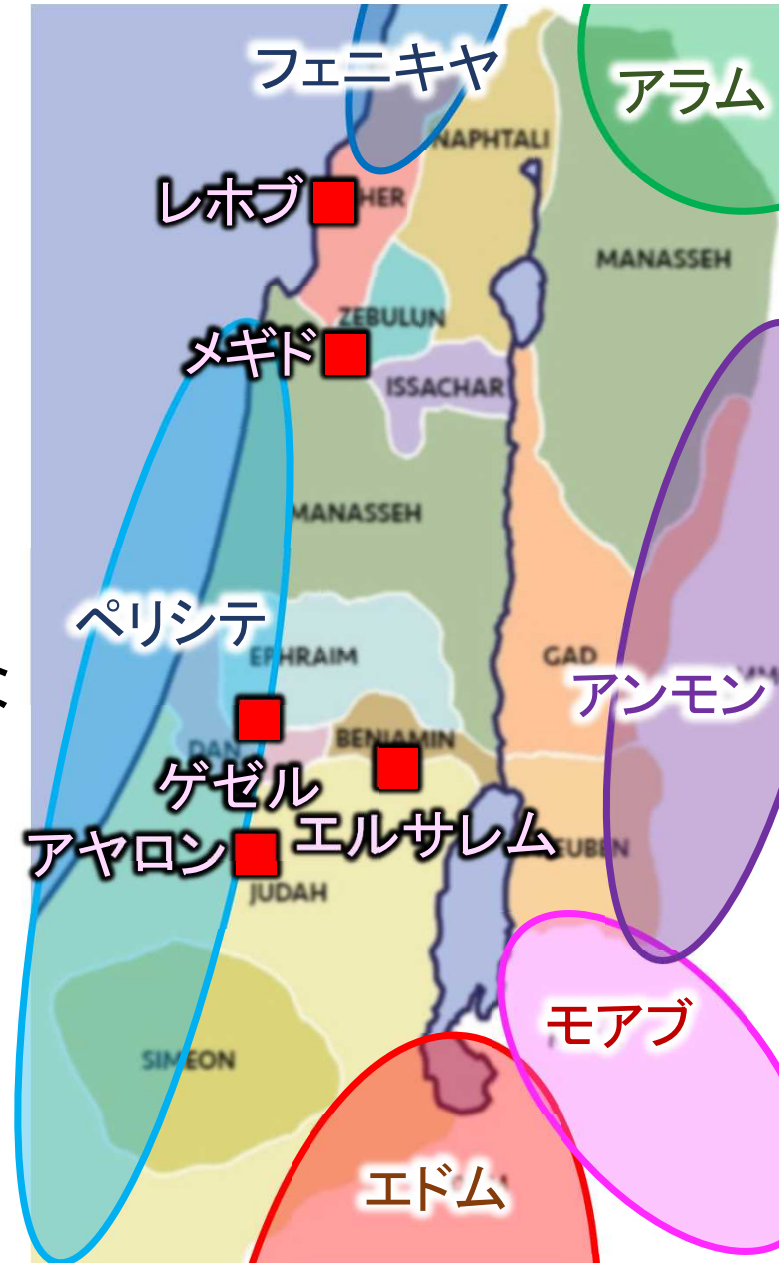
【大患難時代】

メシア再臨

【千年王国】

## 【残された土地】

- ヨシュアに率いられたイスラエルは、12部族それぞれの相続地を手に入れた。
- しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。





## 【士師・さばきつかさ・とは？】

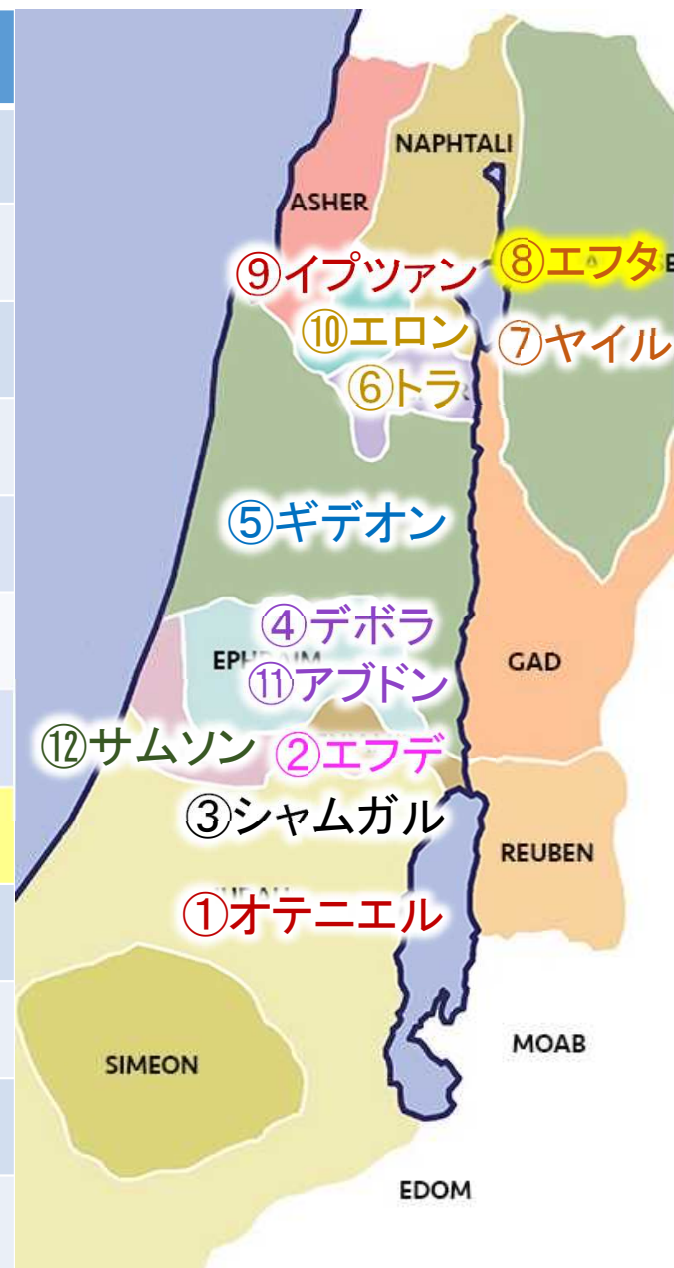
- 神が立てた、イスラエルの一部族のリーダー。  
士師という正式な地位があるわけではない。  
裁判官。政治的、軍事的指導者。  
民の解放者、救済者。➡いろいろな立場を兼任。

## 【士師記で繰り返されるイスラエルの罪】

- ❶ 背信 ...カナンの偶像礼拝に取り込まれる
- ❷ 裁き ...主が異邦の民を用いてイスラエルを裁く。
- ❸ 悔い改め ...イスラエルは主に助けを求める。
- ❹ 士師による解放 ...主は、士師を送り敵を退ける。



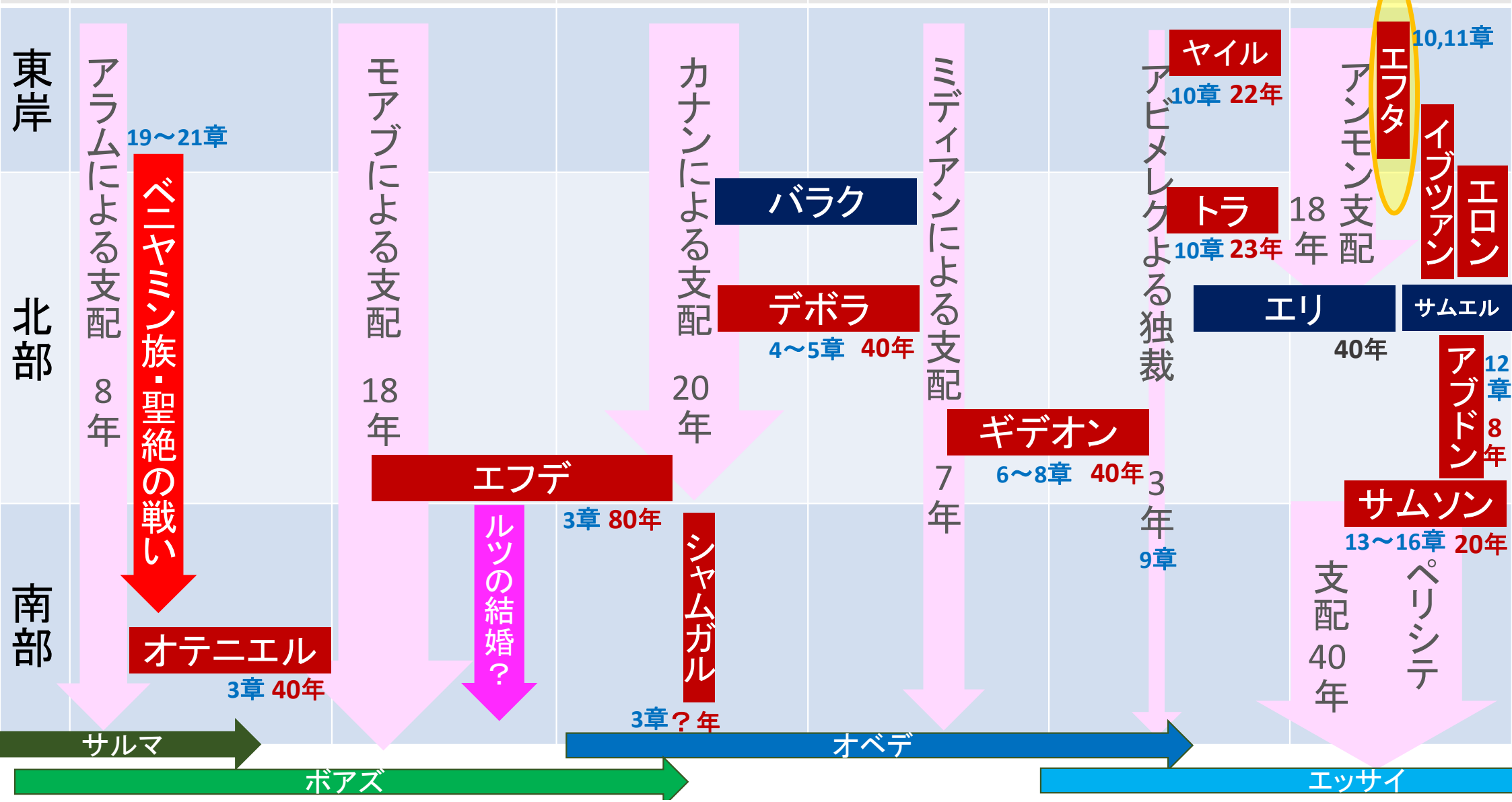
士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7～11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12～30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1～5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	6:1～8:32	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1～2	イッサカル	?
⑦ヤイル	10:3～5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6～11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イプツァン	12:8～10	ゼブルン	?
⑩エロン	12:11～12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13～15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1～16:31	ダン	ペリシテ人



# 【士師の時代】

BC1200

BC1100





# I. イスラエルの罪

士師記10章6～18章



ヨルダン川東岸の荒野

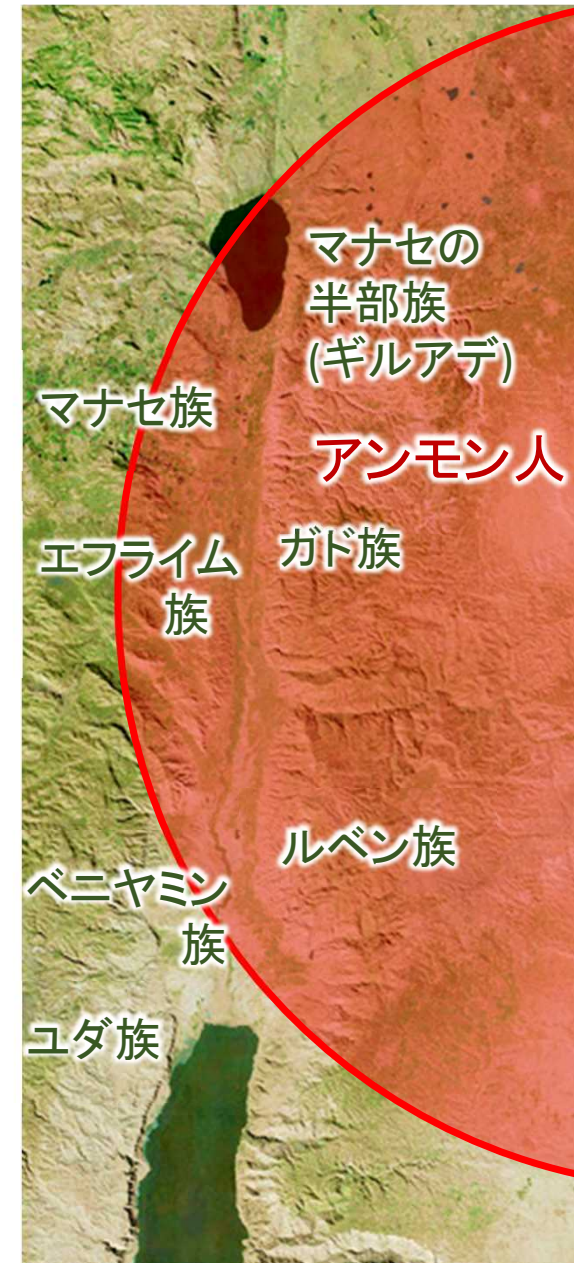


## 【アンモン人による裁き】 士師10:6～9

■ 再び主に背き、様々な偶像礼拝に落ちこんでいったイスラエルを、主は、地中海沿いではペリシテ人に、ヨルダン川東岸ではアンモン人によって裁かれた。

■ アンモン人は、アブラハムの甥ロトが、ソドム滅亡後、二人の娘に犯されて生まれた子の一人ベン・アミの子孫。もう一人の子モアブが、モアブ人の先祖。

■ イスラエルがかつてアモリ人を打ち破って勝ち取ったヨルダン川東岸をギルアデを中心に、アンモン人は、18年に渡って支配し、勢力は西岸にも及んだ。



【イスラエルの悔い改め・主の憐れみ】 士師10:10～16

- イスラエルは、偶像礼拝の罪を認め、主に助けを求めた。
- イスラエルの陥った偶像礼拝は、かつて、主が救い出された敵対する民族が崇めているもの。その罪は大きい。
- 「これ以上救わない。あなたがたが選んだ神々へ叫べ」と突き放された主に、なおイスラエルは追いつがり、偶像を取り去り、悔い改めた。

10:16 主はイスラエルの苦痛を見るに忍びなくなられた。

➡ 憐れみ深い主は、私たちの悔い改めを待っておられる!!



バアル神の像



## 【高まる緊張・開戦前夜】 士師10:17～18

このころ、アンモン人が呼び集められて、ギルアデに陣を敷いた。一方、イスラエル人も集まって、ミツパ\*に陣を敷いた。

ギルアデの民や、その首長たちは互いに言い合った。「アンモン人と戦いを始める者はだれか。その人がギルアデの住民すべてのかしらとなるのだ。」

\*ミツパ ...“見張り場、物見やぐら”

同じ地名が各地にあったと考えられる。

➡ここでは、ギルアデのどこかか？

■ギルアデの地で、アンモンとイスラエルのかつてない激しい戦いが始まろうとしていたが...



指揮官不在の危機!!



## Ⅱ. アンモン人との交渉

士師記11章1～28節

ヨルダン川上流域・東岸から



## 【ならず者エフタ】 士師11:1～3

さて、ギルアデ人エフタは勇士であったが、彼は遊女の子であった。エフタの父親はギルアデであった。ギルアデの妻も、男の子たちを産んだ。この妻の子どもたちが成長したとき、彼らはエフタを追い出して、彼に言った。「あなたはほかの女の息子だから、私たちの父の家を継いではならない。」

そこで、エフタは兄弟たちのところから逃げて行き、トブ\*の地に住んだ。エフタのもとには、ならず者が集まっていて、彼と一緒に出入りしていた。

■ 不幸な境遇から悪の道に。エフタは、異教の地で盗賊のように力をふるい、名を馳せていたのだろう。





## 【ギルアデのかしらとなるエフタ】 士師11:4～11

- アンモン人の脅威を前に、ギルアデの長老たちは、トブにいたエフタに、指揮官となるよう頼み込んだ。
- 追い出しておいてなぜ今？と拒むエフタに、彼らは再度嘆願した。
- エフタは、主が勝利をもたらされたなら、ギルアデの首領になると告げ、長老たちは主の前にそれを認めた。

11:11 エフタがギルアデの長老たちと一緒にいき、民が彼を自分たちのかしらとし、首領としたとき、エフタは自分が言ったことをみな、ミツパで【主】の前に告げた。

- エフタを指揮官として、戦いの準備が整えられた。



ヨルダンの丘陵

## 【アンモンへの使者の派遣】 士師11:12～16

- エフタは、まずアンモン人の王に使者を遣わし、イスラエルと戦おうとする理由を聞いた。遠い親族関係にあるアンモン人との戦いはできることなら避けるべき。
- アンモン人の王は、イスラエルが取った土地を返すように命じてきたが、これは事実ではない。
- エフタは、反論を送った。イスラエルは、モアブの地もアンモンの地もとっていないと、歴史から告げた。
- ➔ 現代のイスラエルも土地を奪ったと言われるが、不毛の土地を買い、開拓し、国の礎を築いてきた。



ヨルダンの山地

## 【ヨルダン川東岸占領の経緯】 士師11:17～22

- 主は、イスラエルに、遠い親族であるエドム、モアブ、アンモンとの戦いを避けるよう命じた。
  - エドムもモアブも通過をゆるさず、イスラエルは大きく迂回してヨルダン側東岸にたどり着いた。
  - アモリ人は、平和的な通過を求めるイスラエルに戦争をしかけてきた。主が戦われ、勝利をもたらされた。ヨルダン川東岸が占領地となった。
- 11:22 こうしてイスラエルは、アルノン川からヤボク川まで、および荒野からヨルダン川までのアモリ人の全領土を占領したのだ。

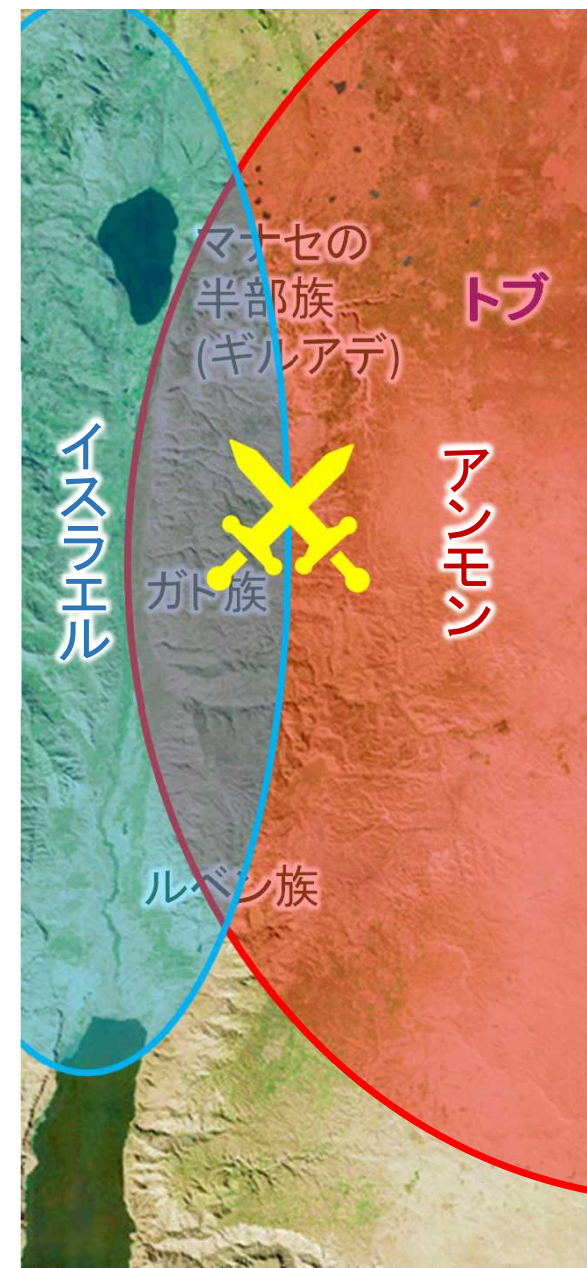




## 【相容れない互いの主張】 士師11:23～28

- エフタは、アンモンの不当と、主の正しさを訴えた。
- モアブの力ある王バラクも、主が守られるイスラエルに直接手出しはできなかった。
- 不当な占領だと言うなら、なぜ300年も見過ごして来たのかとエフタは強く抗議した。  
➡ 東岸占領から、300年が経過。

11:27～28 私はあなたに罪を犯していないのに、あなたは私に戦いを挑んで、私に害を加えようとしている。審判者であられる【主】が、今日、イスラエル人とアンモン人の間をさばいてくださるように。」しかし、アンモン人の王はエフタが送ったことばを聞き入れなかった。



# Ⅲ. エフタの誓願

士師記11章29～40節



ヨルダン川東岸の山地



【エフタに臨んだ主の霊】 士師11:29～31

【主】の霊がエフタの上に下った\*とき、彼はギルアデとマナセを通り、ギルアデのミツパを経て、そしてギルアデのミツパからアンモン人のところへ進んで行った。

エフタは【主】に誓願を立てて言った。「もしあなたが確かにアンモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアンモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る者を【主】のものといたします。私はその人を全焼のささげ物\*として献げます。」

\* 主の霊・聖霊がエフタにくだり、戦う力を与えた。

■ 士師とは、主が一方的に立てられ、用いられた者。

\* “オウル” ...献身という意味での使用例は一切ない。



ヨルダンの丘陵



## 【間違いだらけのエフタの誓い】

① 律法は、魔術につながる人身供養を厳しく禁じる。

申18:10 あなたのうちに、自分の息子、娘に火の中を通らせる者、...があってはならない。

➡子を献げるよう命じられたのはアブラハムだけ!!

② 全焼のささげ物にできるのは、きよい動物だけ。

➡傷もしみもない牛、羊、ヤギ、鳩のみ。

罪ある人は、決してささげ物にはなれない!!

③ 主に仕える献身を誓った場合も、誓願が叶った時には、評価額に2割上乗せして買い戻せた(レビ27章)。



律法をろくに学んでいないエフタ!!

## 【アンモンに対する勝利】 士師11:32～33

こうして、エフタはアンモン人のところに進んで行き、彼らと戦った。【主】は彼らをエフタの手に渡された。彼はアロエルからミニテに至るまでの二十の町、またアベル・ケラミムに至るまでを非常に激しく討ったので、アンモン人はイスラエル人に屈服した。

- 主が、エフタに勝利させられた。
- 士師は、イスラエルへの神の憐れみの象徴。  
士師は、資質や立場で選ばれるのではない。  
信仰すらも関係ない。
- 主は、アブラハムとの契約に基づく恵みによって、イスラエルを度重なる危機から救われた。



ヨルダンの山地

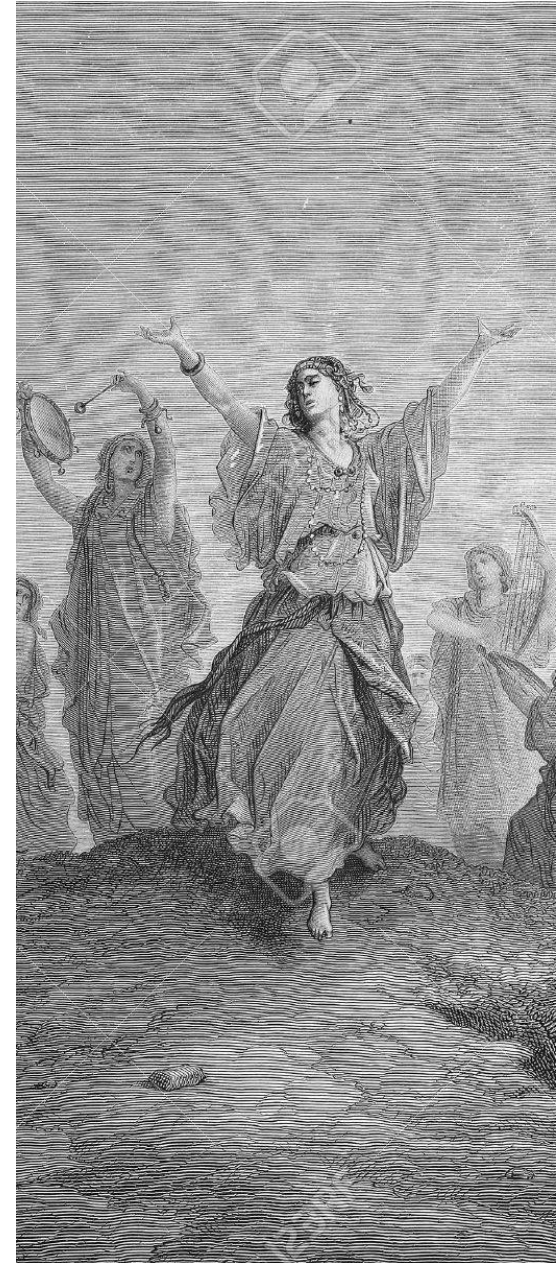
## 【エフタの無知が招いた悲劇】 士師11:34～35

エフタがミツパの自分の家に帰ると、なんと、自分の娘がタンバリンを鳴らし、踊りながら迎えに出て来ているではないか。彼女はひとり子で、エフタには彼女のほかに、息子も娘もなかった。

エフタは彼女を見るや、自分の衣を引き裂いて言った。「ああ、私の娘よ、おまえは本当に私を打ちのめしてしまった。おまえは私を苦しめる者となった。私は【主】に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ。」

■確かに誓約には実行が求められる(申23:21)。

しかし、律法違反の不当な誓約はそもそも無効。





## 【娘の願い】 士師11:36～38

すると、娘は父に言った。「お父様、あなたは【主】に対して口を開かれたのです。口に出されたとおりのことを私にしてください。【主】があなたのために、あなたの敵アンモン人に復讐なされたのですから。」

娘は父に言った。「このように私にさせてください。私に二か月の猶予を下さい。私は山々をさまよい歩き、自分が処女であることを友だちと泣き悲しみたいたいのです。」

エフタは、「行きなさい」と言って、娘を二か月の間、出してやったので、彼女は友だちと一緒にいき、山々の上で自分が処女であることを泣き悲しんだ。

救いは主の律法にあったが...。神への無知が破滅を招く



## 【独りよがりな思いの結末】 士師11:39～40

二か月が終わって、娘は父のところに帰って来たので、父は誓った誓願どおりに彼女に行った。\*彼女はついに男を知らなかった。イスラエルではしきたりができて、\*年ごとに四日間、イスラエルの娘たちは出て行って、ギルアデ人エフタの娘のために嘆きの歌を歌うのであった。



メギドの遺跡に残る  
カナン人の祭壇

人身供養は、厳禁とされた  
偶像礼拝の異教の儀式

\* これは信仰ではない。

エフタの独りよがりな思い込みが娘を殺した。

\* イスラエルもまた、深刻な不信仰に陥っていた。  
誰一人、律法から指摘できなかったという異常。

偶像礼拝がいかに  
イスラエルを  
侵しきっていたか。





そのころ、イスラエルには王がなく、  
それぞれが自分の目に良いと見えることを  
行っていた。士師記21:25



# IV. エフライムとの戦い

士師記12章1～7節



エフライムの山地

## 【同族殺しのエフタ】 士師12:1～7

■ エフライム族がエフタに激しく抗議した。

「なぜ、あなたは進んで行ってアンモン人と戦ったとき、一緒に行くように私たちに呼びかけなかったのか。あなたの家をあなたもろとも火で焼き払おう。」

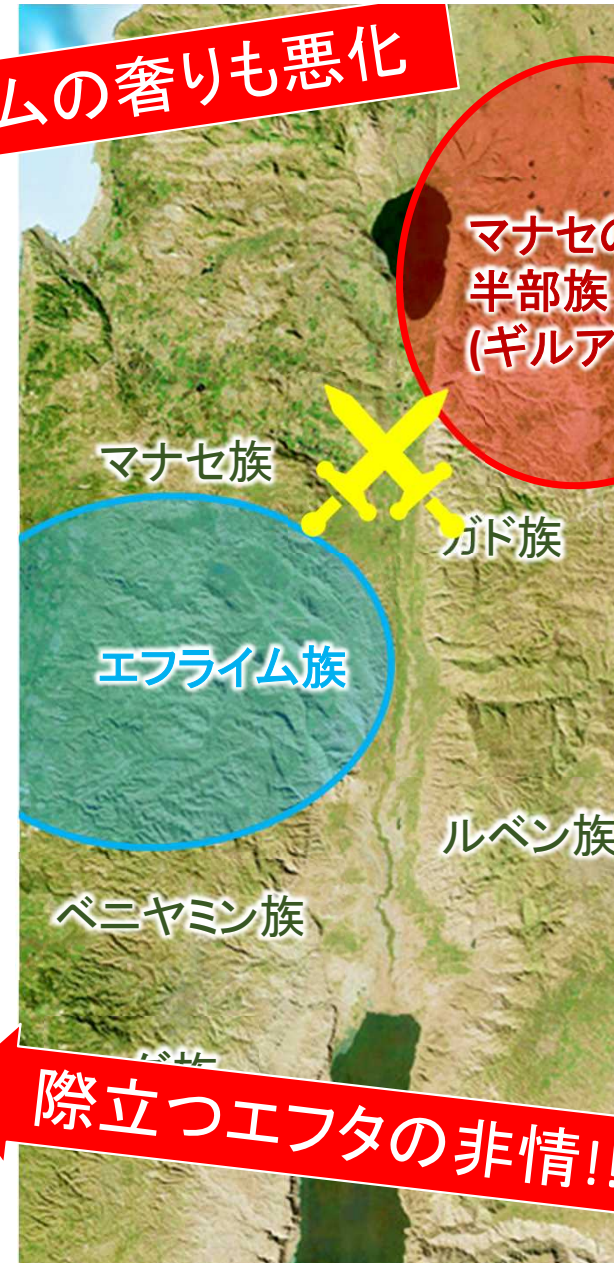
■ 長子権を継ぐエフライム族は、マナセの半部族のギルアデを格下に見、自分たちへの従順を求めた。

■ かつて、ギデオンは、自らへりくだって誇り高いエフライムをなだめたが、エフタは、戦いを選び、ヨルダン側の渡し場を攻め取った。

■ エフタは、渡し場で検問を行い、言葉のなまりからエフライム族と分かった逃亡者4万2千人を殺した。

■ エフタの治世は、六年間に及んだ。

エフライムの奢りも悪化



際立つエフタの非情!!



## 【士師イブツァン】 士師12:8～10

彼の後に、ベツレヘム出身のイブツァンがイスラエルをさばいた。

彼には三十人の息子がいた。また、彼は三十人の娘を自分の氏族以外の者に嫁がせ、息子たちのために、よそから三十人の娘たちを妻に迎えた。\*

彼は七年間イスラエルをさばいた。

イブツァンは死んで、ベツレヘムに葬られた。

\* イスラエルの部族間の政略結婚を重ねることで、イブツァンは7年間、平和に治めた。

■ ギルアとエフライムの戦争後、主によって与えられた平和。



## 【士師エロン、士師アブドン】 士師12:11～15

彼の後に、ゼブルン人エロンがイスラエルをさばいた。彼は十年間イスラエルをさばいた。ゼブルン人エロンは死んで、ゼブルンの地アヤロンに葬られた。

彼の後に、ピルアトン人ヒレルの子アブドンがイスラエルをさばいた。彼には四十人の息子と三十人の孫がいて、七十頭のろばに乗っていた。\*彼は八年間イスラエルをさばいた。ピルアトン人ヒレルの子アブドンは死んで、アマレク人の山地にあるエフライムの地ピルアトンに葬られた。

\* アブドンは、子と孫に恵まれた高齡の士師だろう。

■ 誇り高いエフライムに、デボラ以来の士師が!!





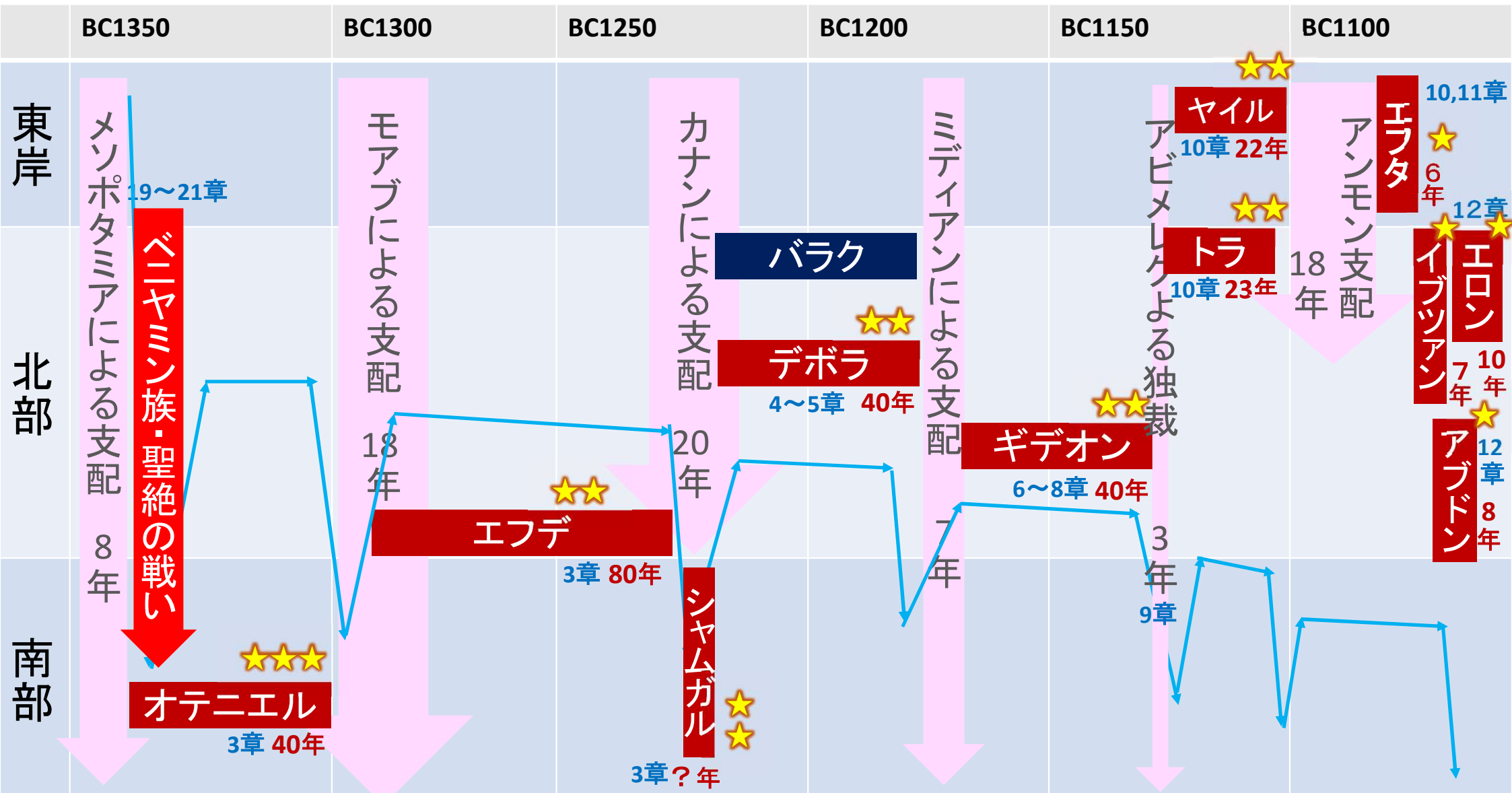
十二人の士師たち

士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7~11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12~30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1~5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	6:1~8:32	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1~2	イツサカル	?
⑦ヤイル	10:3~5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6~11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イブツァン	12:8~10	ゼブルン	?
⑩エロン	12:11~12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13~15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1~16:31	ダン	ペリシテ人



いずれも平和の時代の士師

# 【士師の時代】





## IV. まとめと適用

信仰者が落ち込むとき  
主に聴くことから始めよう

ヨルダンの山地



## 【エフタを反面教師に学ぼう】

■ 律法に反し、人身供養を誓い、固執し、娘を死に追いやったエフタ。

➡ 律法を学んでいれば防げたこと。無知が招いた重い罪。

■ エフタは、アンモン王にイスラエルの歴史を律法から正しく語った。

➡ 律法を学ぶ機会がなかったと、言い訳をする余地は全くない。

■ エフタの罪は、自分の思いを神の言葉より優先させたこと。

同族エフライムと戦い、逃げる者まで情け容赦なく殺した。

➡ 自己中心で支配欲にまみれた、エフタの非情な残忍さ。

■ 身勝手に独りよがりの信仰が招いた、悲惨な末路。

➡ 信仰者は、御心に従い、聖書のみ言葉を聴き取ることが求められる。



## 【聖霊を受けていても重い罪を犯しうるのか？】

- 聖霊は、一方的に神の力を与え、士師たちを立て用いた。  
しかし、士師には、罪も欠けも残ったまま。容易に罪を犯しうる。
- クリスチャンには、聖霊が内住されているが、聖霊は、人をロボットのように支配はしない。愛の神は、人の自由意思を尊重される。  
➡ 自発的に主に委ねる、一人一人の一つ一つの決断が求められる。
- クリスチャンでも、大きな罪を犯しうる。現に犯している人々がいる。  
➡ カルト化した教会リーダー、子を支配する親、嘘やあざむき...
- クリスチャンが罪に陥る原因は一つ。主の御声に聞き従わず、自分の思いを正当化し、み言葉を独りよがりに解釈すること。

## 【日々、主に聞き従おう】

- 主イエスは、偽善者と呼んで、当時の宗教者の責任を厳しく追及した。  
表面的な信仰で、内面の矛盾と嘘を覆っていないかと問われる私たち。  
→ 罪は、内面から私を蝕み、人生から恵みを奪っていく。  
形式的な律法主義は、信仰生活から喜びを取り去っていく。
- 救いは失われることはないが、救いの確信は簡単に失われる。  
→ 罪に陥った信仰者は、不信仰者との見分けはつかない。
- 誰もが罪を犯す。しかし、主の前に悔い改めるならば、ゆるされる。  
主が求める悔い改めとは、具体的な一歩を正しい方向に踏み出すこと。
- 忍耐と憐れみの内に、私を導いてくださっている贖いの主に信頼しよう。  
日々、主に第一に聴き、握りしめたものを手放し、御霊に委ねていこう。



「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したこと、を信じます。

エフタのおかした罪(つみ)は、私たちも簡単(かんたん)におちいるものです。

日々、主に心かたむけて、聴(き)き続(つづ)けるものとしてください。

罪の指摘(してき)を受(う)けたなら、すぐに悔(く)い改(あらた)めて、

立ち返(かえ)ることができますように。

ご聖霊(せいれい)の導(みちび)きにおゆだねします。この身(み)をただしく

導(みちび)いてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」